同志社女子大学生活科学　*Vol*. 44, 66～70（2010）

≪資　　料≫

京友禅工房見学から見るキモノ業界の現状

The Current State of Kimono Industry as Seen from a Visit to Kyo-yuzen Ateliers

前　田　実　香
（Mika Maeda）

1. 工房見学の目的

京都は，京友禅や西陣織など伝統工芸染織の中心地であり，現在も多くの職人が軒を連ねている。各工程に分業体制をしくことによって，高度な品質を維持しているが，需要の減少，職人の高齢化，後継者不足などによって，伝統技術の継承が危ぶまれている。

現在，キモノに関する本は数多くあるが，その多くは着付けや TPO に関するもので占められており，着物を作る技術を知る上で，参考となるものは多くない。また，友禅は特に分業で工程が細分化されているため，おおまかな概要しか書かれていなかった。また，それらの本では，着物の文様や色彩やコーディネート，立ち居振る舞いなどの表面的な美しさが強調され，伝統技法についての解説ページで職人の写真が写っていても，取材に合わせて取り繕われた架空の工房のようにしか見えなかった。

本報は，実際の仕事場を見て伝統の技法を学ぶと共に，伝統工芸染織に携わる方々からお話を聞き，今後の展望について考察したものである。

2. 方　法

本報では，着物文化全体を「キモノ」，仕立てあがった着物を「着物」，染あがった反物を「着尺」，工程途中の生地を「反物」と書き分けて考察を進める。

工房見学では，その仕事内容を学ぶとともに，直接対話できる機会を生かして，①後継者問題について②将来のキモノと技術に対する考え③新しく取り組んでいることについて聞き取り調査を行う。

まず，「京友禅協同組合連合会」[1]の HP に掲載されていた，公開工房のリストから目的にあった見学先を抜粋した。加えて，京都市が主催で 2010 年 8 月 6 日から 16 日に開催していた「京の七夕」という堀川を中心としたイベントの一環として，昔からの職人街である油小路通と小川通の工房の一般公開も活用した。

調査期間は 2010. 8. 7～9. 2，10. 4. であり，7 軒の工房や会社を見学した。

3. 工房見学の内容

3−1.

見学先：橋和（きょうわ）
代　表：元橋　篤信さん
見学日：2010/08/07，08/11
職　種：染匠（せんしょう）（悉皆）[2]
住　所：京都市中京区

染匠である「橋和」ではご主人である元橋さんから，友禅の着物が出来上がるまでの流れを，着尺を標本として教えて頂いた。京友禅は多くの工程を経て完成するのだが，完全分業制で，一本の反物が多くの職人の手を経て着物になる。その内「橋和」の仕事内容は「染匠」という職種で，総合プロデューサーの役割である。依頼者と相談してデザインを決め，各工程の工房に，指示を出して 1 枚の着物を製作，問屋等に卸すのである。染匠は，色柄を決めるためにセンスを磨く勉強が必要であるし，また各工程の工房の職人と相談するため，それぞれの技術についての知識を蓄えなくてはならない。

仕事場と思われる一室に，「着物デザインコンクール」[3]で入賞した作品のデザイン画と，その下絵，出来上がった着物が展示されていた。他にも糊置きがされた

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

反物や，絞りの解かれていない反物があり，それらの標本を示しながら詳しくご説明して頂いた。

友禅の各工程を繋ぐのが染匠の役目である。染匠は各工程における複数の職人の中から，それぞれの得意分野を鑑みて，仕事を持っていく。染匠は直接染織をおこなう技術者ではないが，全体を取りまとめる重要な役割である。しかしながら，後継者について伺ったところ自身の後を継ぐ人はいないとのことであった。

3−2.

見学先：株式会社田畑染飾美術研究所
代　表：田畑　喜八さん
見学日：2010/08/07
職　種：手描友禅
住　所：京都市中京区

「田畑染飾美術研究所」では，友禅を作る各工程を説明して頂き，色見本帳を拝見させて頂いたり，各工程の作業中の職人の仕事ぶりを見せて頂いたりした「田畑喜八」は，創業 200 年を超える老舗であり，3 代目田畑喜八は友禅で初めて人間国宝に選ばれた。現在は 5 代目が，コンソーシアム京都の「きもの学」などの授業で講義をされるなど，友禅製作だけではなく，友禅の良さを伝える活動も行っている。

また，現在多くの工程の中で後継者問題がとりざたされているが，職人の中には女性や，修行中とおぼしき 20 代から 30 代くらいの男性の姿もあり，伝承への気概を垣間見た気がした。この田畑家の家訓は「人の半歩前を歩け」だと以前受講した「京の伝統産業学」[4]でおっしゃっていたが，目新しい技術や機械を導入するのではなく，あくまでも伝統の技術を守り，その中で創意工夫を凝らすことで，新しいものを生み出そうという姿勢が強く感じられた。

3−3.

見学先：丸染工株式会社
代　表：加藤　定夫さん
見学日：2010/08/19
職　種：板場友禅
住　所：京都市右京区

「丸染工」では，型を用いて染料を混ぜた糊を乗せて染色を行う型友禅の工房で，加藤さんの他に 4 名の職人と，後継ぎである娘婿が作業されていた。「板場友禅」の「板場」とは，型染を行う際に背丈の 2 倍程はある，およそ 20 kg 板の上に布を張り付け，作業を行うところから名づけられている。

この型友禅では，後から色を挿すのではなく，色を混ぜた糊を熱で定着させることによって染色する。糊の色と染めあがった時の色は異なるため，色を合わせるのは職人の長年の感覚に任せられている。色は板場職人が決めるのではなく，発注元や染匠が決定した色見本を忠実に再現しなければならない。まずは薄めに調節して，試し布で合わせて調節しながら色を足していくそうである。また，色の数だけ型紙があり，それを一枚一枚当てて色糊を乗せていく。それを反物の数だけ繰り返すのである。

ご厚意で型紙を重ねて糊を引いていく「糊置き」を体験させて頂いたのだが，型紙と布の合印を丁寧に合わせなくては柄はずれてしまうし，ヘラで伸ばしていく着色された糊も予想外に重く，糊の段差が出来ないよう綺麗に伸ばしていくことが難しかった。職人は一瞬で印を合わせ，滑らかな手つきであっという間に糊を置いていた。私も時間をかければ，ムラなく糊を置くことは出来るかもしれないが，日々何十枚何百枚と行わなければならないと考えると，正確さと速さを両立させなければならない。職人の技術は一朝一夕ではなし得ないものであると実感した。

社長の加藤さんは，婿入りしてこの会社を継がれた。元は着物商社にお勤めで，お子さんも着物関係のお仕事をされている。丸染工では，新しい取組みとして，板場友禅だけでなく海外生産の絞り生地を扱ったり，市内に着物レンタル屋を開業したり，インターネット上に出店するなど，時代のニーズに応じた営業方法を取り入れていた。後継者問題について伺ってみたところ，「人は必ず探せばいる。今の後継ぎがいないと言っているところは PR 不足だ。伝統を残そうと考えるなら，自分の会社を他人に継がせられる度胸が必要だ」とおっしゃり，単に不況のせいにするのではない強い答えが返ってきた。

3−4.

見学先：河原田染工
代　表：河原田康史さん
見学日：2010/08/20
職　種：色引染
住　所：京都市右京区

引染を行っている「川原田染工」では，家族で引染工房を経営しており，職人として家業を担うお母さんと息子さんが出迎えて下さり，仕事風景を見学させて頂いた。「引染」とは，模様部分を除く反物の地の色を染め

る工程であり，約 12 m ある反物の両端を専用の器具で挟み，工房の両端に取り付けられた竹に括って伸ばして，伸子（しんし）とよばれる道具を等間隔に刺して張り，呉汁[5]を引いて，染料を刷毛で引いていく。色を指定どおりに合わせるのはもちろんのこと，ムラが出ないよう，リズム良くかつ丁寧に刷毛を動かしていく。地色が濃いと空気中に色が飛び，他の反物に色が移ってしまうため，淡い色は 1 階，濃い色は 2 階というように，場所を使い分けている。また，同じ色であっても生地によって発色が異なるし，この後の工程である水元（みずもと）や蒸しで色が落ちたり，発色が変わったりするため，これらの変化を予想して指定された色に染めなくてはならない。この感覚は長い修業の期間に培われるのである。

引染という工程について話を聞くと，引染は分業作業の中間に位置する工程なので，自分が染めた反物が，どのような反物になったのか，完成品を見ることが少ないそうである。自分が染めた反物に誰が模様の色を挿すのかも分からないし，どんな色調の反物に出来上がるのかも分からないとのことである。同業者の集まる引染の組合はあるが，他工程，他分野間の職人同士の繋がりは薄い。財団法人伝統的工芸品産業振興協会[6]の認める伝統工芸士同士なら，他の工程や分野の職人とも繋がりがあるが，通常は各工程の間に染匠や悉皆屋が入るので，直接取引することもないし，関わることもないそうである。

分業制は各工程の専門性を高め，品質を保つには有効であるが，その分それぞれの繋がりが薄れてしまう。これからを担っていく若い職人にとっては，分業工程を超えた支え合いが必要なのではないかと感じた。息子さんは今も職人として家業を担っており，後を継ぐそうだが，業界自体が縮小して仕事が減っているという不安を抱えていた。また，同業者は 50 社ほどあるが，兼業であったり，開店休業のようなところもあったりするとおっしゃっており，数字の上だけではこの業界の内情はつかめない部分があると感じた。

3−5.

見学先：株式会社谷口染型工房
代　表：谷口　尚之さん
見学日：2010/08/29
職　種：染型彫刻
住　所：京都市右京区

型友禅の型紙を彫る「谷口染型工房」では，型紙や，シルクスクリーンを用いた製品を製作していた。「染型彫刻」とは，型友禅に用いられる型紙を作る工程であり，型紙は色の数だけ型紙が必要であるため，1 枚の反物に対して 400 枚程度の型紙が必要である。それだけの数の型紙を彫ろうと思うと，1 人なら 2 か月はかかるそうである。この「彫る」という工程もまた分業であり，社内や，多い時は白子（しろこ）[7]などに外注しているそうである。ただし，白子でも職人が少なくなってきているそうだ。しかし一度彫ってしまえば，この型友禅は量産が可能であり同じ物を何枚も作ることが可能である。

この工房では，こうした伝統的な型紙だけではなく，インクジェットプリンターを置いて，ネクタイなどの洋装品も製作していた。型紙とインクジェット，すなわち着物のノウハウと最新の技術を用いて，新たなブランドとして立ち上げていた。最新の技術を取り入れ，伝統が押しやられているようにもみえるが，伝統のノウハウと最新の技術を合わせることは，現状に対する柔軟な対応方法の一つであるかもしれない。今はプリントの着物が増加しており，消費者は手染めかプリントか見分けがつかなくなっているそうだ。また，コンピューターで作画すれば，誰でも着物をデザインすることができる。インクジェットプリンターを使えば，あっという間に着物が出来上がる。それは，今までにない面白い柄や色の着物が作られる可能性も秘めており，それもよいと考えておられた。谷口さんは，「色んなことをやって生き残れているのだ」と話された。正解を見つけることが困難な問いに対して，暗中模索であっても，前へ進むことが大切なのだと感じた。

後継者問題について伺ったところ，自身の工房をはじめ，この型の分野では，刀を持って彫る人はなく，後継者問題が深刻で，一番若い人でも 50 代だそうである。後継者育成には費用がかかるが，現状では商品単価も下がり，苦しい中で仕事をしている状況だそうである。利益が出ない仕事では，後継者を育成することが難しい。将来，型友禅は消えていくのかもしれないと懸念されていた。分業制をとっている以上，ある一部分でも後継者がいなくなる危惧があるということは，業界全体の将来が不安だということなのではないだろうか。

3−6.

見学先：坪内紋上絵店
代　表：坪内　三郎さん
見学日：2010/09/02
職　種：紋上絵師
住　所：京都市中京区

「坪内紋上絵店」は，着物をつくる最後の工程で，着物に家紋を描く作業を行っている工房である。コンパスと筆を使い，約 3 センチの小さな円の中に，割合のバランスを見て描いていくこの作業は，多少あたりは付けるものの，基本はフリーハンドである。家紋のデザインは，幾何学的な簡素なものから，自然の植物や動物を繊細に描いたものまで，多種多様である。細かなデザインの細い線を筆で丁寧に描いていく。線は炭に膠を混ぜたものを使用することで，滲みや変色を防止している。

職人である坪内さんは，中学卒業から 50 年この仕事に従事しているが，「同じことばかりしていては，固まって何もできなくなる」と，本業のほかにも色々な活動に取り組んでいるそうだ。全国各地を飛び回り，色々な人に出会って，視野を広げているそうである。家紋や，家紋から家族の繋がりを考えてもらうため，修学旅行生や子供向けに，紋のついたミニうちわ制作の体験教室や家紋の講演会を開いている。坪内さんは，「紋」という制度はもう終わりだとおっしゃっていた。家紋を知ってもらう活動を行っているが，家紋自体には興味関心が生まれても，それが直接着物の需要を増やすことには繋がらないともおっしゃっていた。

紋上絵師の後継者について伺ったところ，紋上絵で一番若い人は 35 歳くらいの方が 5 人ほどあるが，上絵師を本業としている人はいないそうである。

3−7.

見学先：木村染匠株式会社
代　表：木村　信一さん
見学日：2010/10/04
職　種：染匠（悉皆）
住　所：京都市中京区

染匠の「木村染匠株式会社」では，ビジネスとして着物の価値や可能性の話をして頂いた。社長である木村さんは，京友禅は「着物」になることを前提としたものしか染められていないことに注目した。着物を布として売る，というアンテナショップを立ち上げた経緯から，布をガラスのあいだに挟む友禅ガラスの開発に取り組み，現在は布だけでなく薔薇の花びらや羽を挟んだガラスも手がけている。着物の染匠がガラスを製作していることに驚いたが，着物はいくら綺麗であっても，そこから世界に売り出すビジネスにはならない。着物のデザインを「ソフト」にすることで，海外でもビジネスになる可能性を見出していた。また，着物を車や家電に変わるこれからの「メイドインジャパン」と考え，世界にインパクトを与える可能性を考えられていた。私にとっては行き詰まっていると感じるこの着物業界だが，社長は「まだ成熟していない業界で，上手に化けられる」ととらえておられた。

職人の後継者問題について伺ったところ，職人になりたい若い人はいるが，今は技術が求められていない世の中で，職人になったとしても，将来それのみで生計をたてることが難しい。現在の着物はファッションの一つで，値段と連動して需要が増減する。プレタで売られる安い浴衣は，若い人に受け入れられて，浴衣ブームが起こっている。時代の流れや感性が合わなければ売れないし，売れなければ次を作ることができない。こだわって高いものを作ると，着用する対象者が減ってしまうのである。とはいえ，伝統の技術を残すことは重要と，京都市が職人養成のための事業を展開し，京都の伝統ブランドを維持していく取り組みが行われているそうである[8)]。

4. 結果と考察

友禅の世界は完全分業制で，各工程は少人数で家内工業的に行っている場合が多く，実情を知りたいと思っても，一般人はなかなか近寄りがたい世界であると思っていた。しかし，この度訪れた工房や会社は，一般公開しているだけあって，どの見学先も大変親切にかつ丁寧に仕事内容について教えてくださり，また質問に答えて下さった。また，キモノ離れが進む中ではあるが，新しい技術を取り入れたり，先進的だと感じたりする人が多かった。視野を広く持ち，新しい考えを寛容に受け入れ，人との出会いを大切にする姿勢を感じた。

しかしながら，現状では後継者を育成するところまで手が届いていない。分業制の弱点は，一つの工程を担う職人がいなくなれば，全体が立ち行かなくなることである。どの工程でも後継者不足は深刻であり，また後継者があったとしても，経済的な面で将来の不安は付きまとっている。

また，染織の技術は着物と密接な関係をもって発展してきたが，その着物と技術が乖離し始めていると感じた。着物は最新の技術が役を担い始め，伝統の技術は新しい活用方法を模索し始めている。キモノの衰退という「ピンチ」に，伝統技術は「着物」という殻を打ち破って，新たな世界に飛び出す「チャンス」なのかもしれない。

5. 今後の研究課題

これらのお話を聞いたのは，分業の中でもごく一部の業種，その中でもごく一部の職人さんや社長のみである。公開工房をなさっているだけあって，先進的な方が多かったのだが，すべての職人さんがこのような考えではないであろう。

もっと多くの方の意見をお聞きしたいのだが，一般向けに公開工房をしているところは少ない。そこで，「京友禅協同組合連合会」を中心として，各組合の方々にアンケートをお願いすることを考えている。

また現在，和装を教育の中に取り入れようという運動がある。「日本国民に対して日本人の生活に根差した服飾と伝統文化の伝承を学校教育の中で行うことにより，広く日本文化，和の服飾文化の振興と発展を図ることを目的」として，中学校の技術家庭科の授業内に和装教育の必修化を求めて，「NPO 法人和装教育国民推進会議」[9]が要望書を文部科学省へ提出した。この団体が想定している授業の具体的な内容としては，1 時間の着物文化の歴史学習に，2 時間の浴衣の着方と立ち振る舞いの学習である。着装ということに関して，浴衣の調達や講師の派遣に際する資金の問題など，実現に向けてはまだまだ考えなくてはならない点は多いが，2007 年に 5 中学が統合してできた京都市下京中学校では，統合前の成徳中学校が 2000 年から行ってきた行事を引き継いだかたちで，毎年年 1 回「浴衣登校の日」という，全校生徒，職員が浴衣で登校するという行事を実施し，和装教育のモデル校となっている。

このようにキモノといっても，職人などの作り手，和装業界関係者，消費者，行政など，それぞれが様々なキモノ文化継承のための対策を考えている。今回は「作り手」に焦点を当てて調査を行ったが，今後は様々な視点から幅広く調査，研究していきたい。

注

1）「京友禅協同組合連合会」とは，京友禅において分業化された各工程の組合を連合した上部団体。京友禅に関わる手描染，型染の工程で分業化された各部門の組合を取りまとめ，現在各工程の 12 の協同組合で構成されている上部組合である。事業としては，京友禅の展示会開催，全国各地で PR イベント行う需要開拓事業，後継者育成のための研修事業や技術・技法の継承のための記録収集・保存事業を行っている。http : //www.kyosenren.or.jp/index.html 参考

2）悉皆には，着物の企画・製作の意味合いを持つ悉皆と，染織補正の意味合いを持つ悉皆があるが，それらを区別するために企画・製作の悉皆を「染匠」と称するところもあるようである。

3）全国染織連合会主催で行われる公募制の着物のデザインコンクール。2010 年度で 14 回目を数える。ジュニア部門と一般部門，プロ部門がある。入賞した作品は，実際に着物として再現される。

4）「京の伝統産業学」とは，公益財団法人「大学コンソーシアム京都」で開講されていた授業。京都の伝統産業に係る職人や社長が講師となって授業が行われた。2008 年春学期に受講。

5）大豆をすりつぶして作る染料の定着液のこと。

6）「日本伝統工芸士会」とは伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づき，伝統的工芸品産業の振興を図るための中核的機関として，国，地方公共団体，産地組合及び団体等の出資等により，民法第 34 条に基づいて昭和 50 年に設立された財団法人。http : //www.kougei.or.jp/kougeishikai/index.html 参考

7）三重県鈴鹿市にある白子町。江戸時代より伊勢型紙の産地として有名。

8）京都市産業観光局が主催する「みやこ技塾」では，染織や西陣織など各分野別に，優秀な技術者を育成するための研修が行われている。また，後継者育成資金の交付も行われている。http : //www.city.kyoto.lg.jp/sankan/ 参考

9）「NPO 法人和装教育国民推進会議」とは，（1）和装教育を実現するための国会及び関係官庁への請願事業（2）和装教育の導入を実現するための，全国各地区教育委員会，中学校への請願事業及び和装教育実施に際しての支援事業（3）全国各地区小学校，中学校，高等学校，大学ほか諸学校における和裁，きもの着付け，和装文化学習など和装教育授業での外部専門家講師派遣事業（4）和装教育の推進を図るための国民向け広報宣伝事業，を行っている NPO 団体。呉服組合や和装に関する団体が中心となって活動を行っている。http : //gofuku.or.jp/wasou/index.html 参考

（2010 年 11 月 30 日受理）